

第1回 麻布十番と広尾を歩く

麻布十番と広尾を歩く

街歩きの前に、1万分の1地形図を広げて見ます。

首都高速2号線の下を流れる渋谷川沿いにある二つの街は、西や北に高台を見る河川周辺低地に位置していて、似た者同士のような街です。何が同じで、何がことなるのかに注目して街を歩いてみました。

東京メトロ麻布十番駅から商店街をめざすと、どこまでも道は上りです。地図を見ると麻布十番の標高は5メートル（広尾の商店街は標高8メートル）、見上げる先にある高級マンションが並ぶ六本木通りは標高32メートルもあります。高級住宅地は、価格とともに標高も高いのです。

さ一て、『みんなのナビ(R)』を手にして、街歩きを始めます。

麻布十番の西には、台地がせまっています、そのハケ（関東では台地の崖をこう呼ぶ）の周りには10数個のお寺の記号が並んでいます。中でも、ひときわ大きい善福寺をたずねます。

ここは、明治期にはアメリカ公使館が置かれたところです。山門の左手にある「逆さいチヨウ」の大木がみごとです。境内には、その他にもいくつか、みどころがありますから探してみましょう。

境内の散策を終わって通りへもどりますが、その前の門前にある「柳の井戸」も、のぞいてみます。こんこんと湧いている清水は、関東大震災や太平洋戦争の際にも重用されたそうで、喧騒の中の泉ですが、いまでも飲めそうなくらいに澄んでいます。

すぐ先の大黒坂下の分離帯にある小さな公園で、野口雨情の童謡「赤い靴」のもとになった、そして、ちょっと悲しいいきさつから親と別れてアメリカ人宣教師に預けられた「きみちゃん」の像を見ます。

実は、アメリカに渡って、幸せに暮らしていると思われていたきみちゃんは、病のため東京の教会孤児院に預けられ、短い生涯を閉じていたのです。

次は通りを北上し、店先の匂いに誘惑されて、豆菓子の「豆源」でおかきを、たい焼きの「浪花屋」では湯気の上がる魚？を1ぴきを口にいれます。

たい焼きを食べると、「『しっぽがうまい』といつも思うのですが、『しっぽだけください』と言ったら店の人はどう反応するだろう」などと馬鹿なことを考えながら、ヒルズ族との格差を感じる庶民的な通りをあとにして、坂好きの人にはたまらない雰囲気のある暗闇坂を上ります。

坂上には、暗闇坂のほか、大黒坂、狸坂、一本松坂が四方に広がっています。地図読み人は、地図の等高線をたどって上り下りを確認して、納得します。

そののちは、一本松坂で見たトウモロコシを立てたようなマンションとは対照的に、蔦が壁面を埋めつくしたやわらかい雰囲気を感じられる教会建物などを見ながら、仙台坂上の五叉路あるいは六叉路だろうかと思われる複雑な交差点を経て、私には縁のない超有名進学校の麻布中学・高校を横目に見ながら「有栖川宮記念公園」と向かいます。庭園内には、等高線が5本ほど重なる（約10m）深い溪谷があって、おどろくほどの流水がありますが、水は人工的なもののようです。

同公園の東隅には、都市内では珍しい地上設置の三角点がありますが、今日は寄り道をしません。

都会であることを忘れさせるほどの緑陰が多い公園内には、大型犬を連れた外国人の比率が高いようです。ただ、大型犬から危険にならないように、柵をめぐらして子ども遊ばせる風景は、ちょっと異様です。

公園を抜けると、すぐに広尾商店街です。

路上に椅子をならべたカフェがあちこちにあり、明治屋には高級食材が並びます。

つい近ごろまで庶民的だった麻布十番商店街の雰囲気とは少し異なります。大使館などが、ぐるっと立ち並ぶ広尾の街は、ずっと以前から「オシャレ」が似合っていたはずですが、広尾の祥雲寺で、初代中央气象台長荒井郁之助の墓を訪ねる私には、オープンカフェで食べるチョコレートムースより、たい焼きのしっぽが似合っていますが、「有栖川宮記念公園」の緑も捨てがたいものがあります。



写真 1-1 善福寺「逆さイチョウ」の大木、
写真 1-2 「きみちゃんの像」、写真 1-3 麻布十番商店街で



写真 1-4 暗闇坂、写真 1-5 本松坂で、写真 1-6 有栖川宮記念公園、写真 1-7 広尾商店街
で

第2回 坂本竜馬を探しに品川宿へいってみる

東京周辺の旧街道の宿場で、当時の趣をほんの少しでも残しているところといえば、板橋宿や千住宿、そして品川宿でしょうか。

中でも品川宿は、何ととっても東海道の第一の宿です。西国から江戸へ向かった多くの旅人が、しばしの間ここで旅の疲れを休めました。そして、あらためて身支度をととのえて、二里ほど先になる大江戸をめざしたはずです。

品川宿を南から入ると、曲がりくねった町並みの右手には、干潮時に干潟となる広い海が、左手には寺院の葺が光る長い丘が見えたはずです。

いまでは、とてもそのときの風景が感じられるとは思いませんが、多くの歴史が詰まった品川宿を江戸（東京）方向からたどってみます。

歴史が感じられるといえば、ここ品川宿の寺院などには、板垣退助、岩倉具視、土佐藩主山内豊信（容堂）などの墓があります。また、京浜急行立会川駅近くには、土佐藩品川下屋敷や浜川砲台があって、坂本竜馬がここに詰めていた関係から高知市より寄贈されたという彼の像も建立されていますから、ここをめざして、京浜急行北品川駅から南へと街歩きをスタートします。

品川宿の始まりは、きれいにカラー舗装された商店街です。近くの案内所で「（品川）まち歩きマップ」を手に入れ、すぐに左手（東へ）折れて、潮の香りをもとめて船だまりをめざします。北品川橋の北には屋形舟が、南には釣り舟が係留されていて、まわりがビルに囲まれていても東京湾沿いであることを教えてくれます。ここは、海岸線近くで大きく蛇行していた、かつての目黒川の河口にあたります。

その後は、旧街道を右へ、左へとトラバースしながら南へと進みます。

200年前に、品川沖に迷い込んだ鯨の骨を埋めて供養したという塚のある利田（かがた）神社の鯨塚。塚そのものは、それほど興味深いものではありませんが、多摩川に迷い込んだアザラシに群がる現代人と当時のさまとを重ね合わせて案内板の文字を追うと、「ふむふむ」とうなずきたくなります。そして、利田神社のやや東に位置する台場小学校は、その名の通り台場跡に建設されていて、現在東京湾に残る台場跡と学校敷地の形を地図上で比べて見ると、驚くほど一致していることが証です。

そして、龍などを巧みに描いたこて絵の善福寺、レンガ塀のある正徳寺・天龍寺など、かつては江戸湾が一望できたと思われる品川富士が境内にある品川神社、三重塔が迎えてくれる本光寺などを訪ねます。

次は、かつての海岸線を探しに、北品川2丁目の裏通りに寄ってみると、石積などにその面影があって、旧街道から道二本先には、波打ちよせる海がせまっていたことが実感できます。

見どころはいっぱいあって紹介しきれません。皆さんは、「まち歩きマップ」をもとに、かつての海（跡）を見る、古い石塀や建物を探す、有名人の墓や石像をめぐるなどといったテーマを決めてめぐるといいでしょう。

私たちは、品川宿の女性や餓死者などが投げ込まれた海蔵寺、各所にある古い井戸、本陣跡などの旧跡、旧街道に並ぶ駄菓子屋さん、履物屋さん、畳屋さんなどの店先をのぞきながら、立会川駅近くの坂本竜馬蔵に向かいます。

訪問時には、大河ドラマの「竜馬伝」が放映中ということもあって、像のまわりには、たくさんの人が詰めかけ、説明ボランティアの話しに耳を傾けていました。

特に意味はありませんが？ 最後は、鈴が森刑場へ送られる罪人の親族が、ひそかに見送ったという涙橋で、その昔に思いをはせて、品川街歩きをお終いにします。



写真 3-1 旧東海道品川宿の始まり、写真 3-2 品川浦船だまり、写真 3-3 正徳寺レンガ塀



写真 3-3 品川神社、写真 3-4 本光寺三重塔、
写真 3-5 南品川 2 丁目辺りの海辺跡残す石積み



写真 3-7 蓮長寺の古井戸、写真 3-8 海雲寺本堂天井の纏絵、
写真 3-9 立会川駅近くの竜馬像

第3回 神楽坂から峠を越えて神田川へ

今回の街歩きは、超有名な坂道を取り上げます。

明治期中期から先、牛込地区最大の繁華街であったという神楽坂です。その名は、「この地域の祭礼で神輿が通るときに神楽を奏したから」「若宮八幡の神楽の音がこの坂まで聞こえたから」などといわれています。

一時は、神楽坂といえば、裏通りの料亭街を歩く着物姿のお姉さんと三味の音が連想されたのですが、今では街歩きする人で賑わう楽しい坂の道です。

地図にこだわりを持つ人としては、等高線の入った地図も参照しながら、坂道と路地を楽しみつつ、上り下りに注目して JR 飯田橋駅（標高 7m ほど）から歩きを始めます。

外堀にかかる牛込橋を後ろにして、交差点を渡るとすぐにペコちゃん焼の不二家が目に入り、すぐにやや急な坂道が始まります。

和菓子や陶器などを売る店を気にしながら通りを二百メートルも進むと「善国寺」のある、ちょっとした坂の上に出ます（標高 18m ほど）。

しかし、ここは「神楽坂上（交差点）」ではありません。

中華まんじゅうの「五十番を過ぎて、やや坂を下り、南西から北東へと流れる川底のようになった大久保通りとの交差点が「神楽坂上」です（標高 14m ほど）。

少々ややこしいのですが、「神楽坂上」は坂の上ではありません。それどころか、少々谷底なのです。

神楽坂（通り）のてっぺんは、底になった「神楽坂上」交差点から、再び坂を上って三百メートルほど進んだ、東京メトロ東西線神楽坂駅周辺にあります（標高 24m ほど）。

この辺りは南から北東へ張り出す尾根の途中にあたります。神楽坂から続く道は、この先で西に下る地蔵坂となります。さらに、大きく北へ折れると渡邊坂や早稲田通りとなって下りきると神田川に出ます。

現在の神楽坂町名は飯田橋近くの神楽坂下から、峠のてっぺんにある神楽坂駅の辺りまでをいいます。その間に上り下りがあって、ひとつの「坂」としては、少し矛盾がありますから、坂を説明する標識は、「五十番」や明治期の高さの測量に使われた几号水準点のある「善国寺」辺りで終わります。

このように、神楽坂は武蔵野台地の高まりを上り、神楽坂上は台地を侵食した谷にあたります。



図 2-1 神楽坂付近の地形

さて、地形観察だけでは、おもしろくありませんから、神楽坂の左右にある小路をめぐるります。

芸者新道、小栗横丁、本多横丁、兵庫横丁、かくれんぼ横丁など地名を聞いただけで楽しくなる石畳の小さな通りや階段道の両側には、日本料理をする割烹などが多くあって、表通りとは異なる雰囲気を持っています。

そうした建物に見とれて、ちょっと迷うといい気持ちになります。

そして、坂のてっぺんよりも坂のどちゅうに楽しい、興味深いものが多いです。小道の曲がりや階段道、小物を売る店や雰囲気のいいレストランも。

最後も、やっぱり地形観察になってしまいますが、神楽坂下から「五十番」や「善国寺」手前までは、小さな尾根を上っていますから、左右どちらに折れても下りの坂道になります。迷ったら、坂や階段を上ります。



写真 2-1 神楽坂商店街、写真 2-2 ペコちゃんも、
写真 2-3 中華まんじゅうも迎えてくれる



写真 2-4 善国寺几号水準点（明治期初期に使われた水準点で、「不」の形をした小さな刻みがある）

写真 2-5 東西線神楽坂駅付近の「神楽坂」の最高所

写真 2-6 味わいのある、かくれんぼ横町で



写真 2-7 本多横丁で